

る。表には見えなくてもみんなそれぞれ苦勞がある。人さんのことはその人にしかわからんことがある。だから人のことは何も言ってはいけません。これが母からの言い伝え。あたしは面と向かって言いたいことは言うけどね」と最後に笑って。

なぜかしら、大切なことはお酒の席で習うことが多い。この夏、最高のお酒だった。

小さな世界

櫻木 大祐

ハラ閑3号が発刊される1日前に起こった、ハシゴ酒3軒目の店での出来事。

その店は食べ物の持ち込みがOKなので、資さんでかしわにぎりを買って持ち込んだ。店主に1つやって、もう1つは私が食べた。

しばらくして店主が私の前に生ビールを置き一言。「次の樽に替えたいので手伝ってもらえませんか?」「しょうがないなあ〜」と言いながら、有り難くお手伝いさせていただきました。調子にのった私はカラオケを3曲歌い、常連さんとレッドツェッペリンの話をしていたその時だった。

店主が突然、胃の辺りをおさえもがきだした。最初は彼の冗談かと思ったが、そうではないことは酔っぱらいの目にも明白だった。狼狽える客(もちろん私を含む)…。彼をソファーに寝かせて救急車をよぶ。店の中でのたうつ彼を他の客にまかせ、私は救急車の誘導の為、道に立った。ほどなく救急車は店の前に到着し、私が同乗する事になった。

ざわめく無線、ひしめく医療機器、目の前に病人、せわしなく動き回るヘルメットのおじさんたち、サイレンを鳴らしながら私を横移動させる小さな世界。彼はヘルメットのおじさんの質問に答える合間合間に、「櫻木さん、ゴメン、ゴメンね…」と言い、私は「大丈夫、大丈夫、オレ暇だから」と病院に着くまで繰り返した。

病院に着き私は待合室に、そして彼はストレッチャーで処置室へと運ばれていく。私が待合室にいく道すがら、看護師が質問をする。「患者さんのお名前は?」「ご関係は?」私は答える。「知りません」「店主と客です」そうだ、そういえば私は彼の事を何も知らない。

でもそんなことはどうでもいい気がする。苦しんでいる人がいて、その場に私がいた。ただそれだけのこと、小さな町の小さな飲み屋で起こった、小さな小さなお話だ。

彼に、そして戸畑に幸あれ!カンパイ!!

ナルシスト

櫻木 大祐

私の飲酒ライフは、バーボンから始まった。理由なんて簡単だ、なんとなくカッコいいから。味なんてわかるはずもなく、訳もなくロックでガブ飲みした。多聞にもれず泥酔し、嘔吐し、爆沈する日々。調子のいいときは2本あけることもあった。

それからしばらくして、私はジンにはまることになる。あの独特の香り、とろりとしたのどごし。そして何より、「ジンを飲んでいるオレ」に酔いしれた。いや、まだその病気は現在進行形だ。

ビールも焼酎もカクテルだって嫌いではないが、なんだかしっくりこない。日本酒は2、3年前に初めて飲んだ。小馬鹿にしてガブ飲みし、そしてつぶれた。最近はおいしいと思えるようになったが、まだまだ分からないことだらけだ。

日本酒は…深い。

振舞酒

櫻木 大祐

ある日のこと、かの名優森繁久弥が大部屋に酒を持って現れた。「皆で飲んでくれ」。沸き立つ大部屋。

大部屋役者たちは、手に手にやれ「一級だ」やれ「特級だ」と大騒ぎ。そこで、森繁が一言、「酒なんてものは、サンキュウサンキュウって飲むもんだ」。

「酒や仲間に感謝しつつ、楽しく飲みたいものですね」

さて、私が酒と並んで好きなモノが「仕事」と「映画」。そこで最近観た映画（DVD）の中から、私のおススメ作品を独断と偏見を持ってご紹介。酒の肴にいかがでしょうか。

- ・「そうかもしれない」 保坂延彦監督作品

老夫婦の「かくも長き新婚生活」。

雪村いずみの熱演が光る。

失禁した妻の世話をする夫に、妻が「どんなご縁で…」とつぶやく。座り込む夫。夫婦って他人なんだよなあ… でも、縁なんだよなあ、人って…。

- ・「悪夢のエレベーター」 堀部圭亮監督作品

エレベーターに閉じこめられた、理由あり4人の密室劇。

ストーリー展開、バランス、テンポ申し分なし。

「針1本でいいよ。でも本当に飲んでもらうからね…」という台詞をキーワードにご覧ください。女って… コワイ。

出・会・い パート3

清張の会会長：大野 真由美

もう4年前になるのかなあ、初めて「北九州角打ち文化研究会」という名を耳にしたのは。最初は、突っ張って言ったものです。「何がいまさら、研究会なんだよお。『角打ち』は、先人たちが築いてくれた、この鉄に支えられた工業都市、北九州の文化なんだよお。汗を流し、三交代の仕事を終え、家に帰る前に朝から酒を飲ませてくれる酒屋にチョイト寄って一杯に癒しを求めた北九州の文化なんだよお」、いまでも「角打ち」は北九州の文化だと思っています。

“歌は世につれ…”ではありませんが、「角打ち」も時代に応じた変化をしていました。私がチョイト「角打ち」をお休みしていた40年間に。誘われて角文研のイベントがあるというので重く(?)大きい(?)腰を上げて参加したのが、「はらぐち酒店」でした。まあ、店内大勢の人たちがひしめいていてビックリ。これが、「はらぐち酒店」と「はらぐちの仲間」との出会いです。色々なイベントに参加させてもらい、私の「角打ち」の復活です。

美味しい酒は、横並びの仲間(そこに居れば仲間)たちが居て、最高なものとなります。大きな声で語り、笑い、癒し… ああ、これが私の今の「角打ち」なんだなあ。酒はいいなあ、仲間はいいなあ。

私の「角打ち」復活となった角文研に感謝！

私と美味しい酒と大切な時間を共有してくれる仲間たちに感謝！「よろしくネ」

「球形の荒野」追悼映画会

清張の会事務局長：上田喜久雄

退院して間もなくの8月5日に1通のメールをいただいた。「父貞永方久儀、7月14日80歳にて永眠いたしました。ここに生前のご厚誼を深く深謝し謹んでお知らせ申し上げます」との。差出人は故人の二男貞永淳氏からだった。淳氏とは一面識もないが父のパソコンから知ってのことらしい。つづいてメールには「大分合同新聞社のご厚誼により8月13日から26日まで別府ブルーバード劇場で故人の監督作品『球形の荒野』を上映していただけることになりました。ご来場いただけますと幸いです」とあった。

別府行きを21日(日)と決め、徳永さんにメールを入れた。徳永さんは別府駅までわざわざ迎えに来てくれ、映画が終わると車で大分市内の御手洗酒店まで案内してくれた。休みのところをわざわざ開けていただいた御手洗酒店は、噂どおりのステキなお店で、私より大野さんの方がお気に入りのようであった。追悼映画会が終わってすぐの角打ちだけに、少しは気がひけなくもなかったが、そこは大分の出身で酒の大好きな貞永監督のこと、きっと天国から「よう来てくれたね」と、あのにこやかな笑顔で喜んでくれたのではないかと思いがやすらいだ。

炭鉱記録画と角打ち

安行 啓二

5月25日、山本作兵衛氏の炭鉱記録画と記録文書の世界記憶遺産への登録が内定したとの新聞を見て、吉本先生と5月31日に田川市石炭・歴史博物館を訪ねた。

行きは折尾からJRで直方、直方から平成筑豊鉄道で田川伊田、帰りは西鉄高速バスで小倉となった。

博物館の1階は、筑豊炭田の資料と当時使用されていた機器・工具等が展示してあり、作兵衛氏の記録画等は2階に展示していた。観覧者はまだまだ少なくゆっくり観てまわることができた。

63歳から92歳まで描き続けた記録画は、生き生きと描写されており記録画に書かれた文章を読むと一層、炭鉱の様子、作業や生活が窺われ圧倒される、日本の宝、いや、世界の宝になったのは当然であり、文部科学省を出し抜いての田川市と福岡県立大学の偉業は心地よく感じた。

「炭坑(ヤマ)の語り部 山本作兵衛の世界 584の物語」をアトでゆっくり楽しもうと入場券とは別に2,000円で購入した。結構、売れているようであった。

田川市石炭・歴史博物館を訪ねるのを決めたのには、もう1つの重大な？理由があった。観覧後に、田川で「角打ち」ができる、「こりゃいいや」と思ったからである。また、作兵衛は年に200本近くの酒を呑んでいたようで、チョットあやかろうと。

調べておいた、歩いて5分以内で繋がる酒屋4店で「角打ち」。4店とも、椅子があり立ち呑みでなく掛け呑みである。吉本先生いわく「現金で呑んでも掛け打ち?」。足、腰の悪い方には好条件である、それだけ年配者が多いと思われる。

「角打ち」におまけがついた。最後で呑んだ店に、古びた箱のサントリーリザーブのブック型、サントリーオールドの樽型、サントリーウイスキー21とズブロッカウオッカが棚の上で埃をかぶり陳列されていた。ウイスキーは箱に特級と表示してあり古さを感じた。

呑みながら冗談で「売りますか?」と聞いたところ「いいですよ」。値段を聞けば、帳簿を見ながら「当時の価格でいいです」との答えが返ってきた。早速、吉本先生とウイスキーとウオッカ計7本を購入した。

作兵衛氏の記録画と「角打ち」のために行った田川であったが、ウイスキーとウオッカを「買出し」に行ったように思えた1日であった。

♫は、これまた当然、「はらぐち」に寄って一杯、二杯…。

棟方志功展とごま鯖

安行 啓二

棟方志功展を終了間近の6月28日に吉本先生と福岡県立美術館を訪ねた。棟方志功といえば、北九州では安川電機のカレンダーで知られている。私も20年以上前からのファ

ンで、カレンダーを友人から入手していた。が、数年前から不景気のおりであまりでまわってこなくなった。

志功展があると分かり懐かしさから、いつか行かなければとの思いがどこかにあった。行く前日、呑みながら志功展のことを先生に話したら「明日、行こか？」と言葉が返ってきた、それにすんなり飛び乗った。

今回の展示で全長が 26m にも及ぶ「大世界の柵」と「二菩薩釈迦十大弟子」を目当てに行ったが、「倭絵」といわれている肉筆画は板画(版画)以上の迫力で、出身地青森の「ねぶた」を想像させ、「津軽じょんがら節」と同様にダイナミックなパワーを間近に感じた。全体を通して、

——志功は凄い、スゴイ、すごい——

——どこからこのパワーが湧く？——

鑑賞後は志功の酔いを持って、博多駅近くの先生ご最良の某店へ。この店の「ごま鯖」が美味しいと以前から聞いていたので、鑑賞終了時間を店の開店時間に無理やり合わせた。(志功展とごま鯖どちらが本命?)

鯖を 5 mm 位に薄く引いて円状に盛り付け、タレをたっぷり、すりごまもたっぷり掛けてあった。「美味しい!」「でしょう!」「また、来るべきですね」「いいですね」と会話は弾んだ。

当然、芋焼酎をキープした、またひとつ、呑む楽しみを増やした。

次は、九州国立博物館から二日市温泉経由、「ごま鯖」がいいかな?

きき酒

酒夢人：諸岡昭男

お酒のきき酒について・・・少し専門的ですが、知っているると便利です。

利猪口(ききちょこ)にそそいだ試飲酒を官能検査により評価を行う事で、まず色と濁りを見て次に嗅覚で香りを嗅ぎとり口中に少量の試飲酒を含み、舌の上をころがしつつ引込み香を味わいながら味の調和を判断した後、はき壺に吐き出し、さらに後味を検する。口中にとどめおく時間は 2～3 秒が適当とされている。

爛酒利き・・・加温した状態で利き酒

冷酒利き・・・常温の状態で利き酒⇒ほとんどがこの利き酒方式

熱酒利き・・・50 度内外の温度で利き酒

次にきき酒用語について

色に関する用語・・・サエ・テリ・ボケ・山吹色　ほか 18 用語

香りに関する用語・・・新酒ばな・吟醸香・果実臭・木香・老ね香(ひねか)・フーゼル油

臭・つわり香 ほか 43 用語

味に関する用語・・・こく・ごくみ・旨味・まるみ・ふくらみ・さばけ・のどごし

・淡麗な・だれた・甘い・辛い・酸っぱい・苦い・渋い・雑味

ほか 35 用語

男酒 女酒について

男酒・・・通常仕込み水に「硬水」を用い、醗酵を強く進めた短期間から醸出されたやや酸の多い辛口酒のことである。新酒の間は舌触りがどことなく荒々しく男性的でおし味があり、しっかりしているのでこのような呼び名がついている。このような酒は夏を蔵の中で過ごすと酒質に丸みが出て飲みやすくなり、いわゆる「秋晴れ・秋上がり」と称され酒質は向上する。通常は灘酒に男酒が多い。

女酒・・・仕込み水に「軟水」を用い、穏やかに長期醗酵された比較的酸の少ない甘口酒である。新酒の間は女性の肌のように滑らか、酒質もきれいで線が細く飲みやすいのでこのような呼び名がついている。しかし、夏を越すと「秋落ち」といって酒質が低下する傾向がある。

立秋も過ぎ、酒飲みには嬉しい季節になりました。「ひやおろし」を楽しめる。今年は何の蔵の酒を。やはりいつもの蔵の酒を。旅先での思わぬ出会い酒との巡り合いがまた楽しみだ

ビールと肉と汗

大分長浜角打ち学会事務局長：みじんこ

43 歳になった現在も、成長が止まらない。人生初の 0.1 トンが見えた時、嫁の顔が浮かんだ。このままじゃいけない。

最近、お肉を食べなくなった。大好きなのに、食べてはいけない。食べなくても生きていける、と嫁から悟った。食べたくないわけではないが、機会がない。

話は変わるが、初めてポカリスエットが美味しいと思ったのは、真夏にテニスをした後に飲んだとき。同じく初めてビールが美味しいと思ったのは、キャンプのバーベキューで汗だくになりながら飲んだとき。いまでも肉にはビールを選ぶ(機会があれば)。風呂あがりなら、コーラで十分。

今年の夏は、昼間から北九州で角打ち巡りをした。汗をかきながら、エアコンのない角打ちはこたえる。が、行く先々でビールを空けた。日本酒なら途中でリタイアしただろう。そこまでして呑む角打ち巡りを、次回は冬に日本酒でやってみたいと思う。どなたかご同行願います。

投 稿

旅人‘ぶら目玉’こと 松住隆夫

大分で生活しているこの夏、楽しいラジオ番組に出会った。それは毎週土曜日に放送され、すでに 800 回以上続いているOBS大分放送の『夕方なしか』だ。パーソナリティは大分のコピーライター吉田寛さん。

「なしか」とは、大分方言で“なぜだ”という意味の言葉で、社会や家庭の疑問に対して、また自分自身にも問題追求する語とのこと。それをテーマに、リスナーからの投稿“あなたの「なしか」を聞かせてください”で構成されるこの番組、聴いていると毎回結構おもしろい。

特にいちばんおもしろかった「なしか」には、“なしか大賞”が贈られ、大分・九重にある番組スポンサー・八鹿酒造から「第三の麦 なしか！」と「なしかグッズ」がプレゼントされるのだ。

先日の放送で“なしか大賞”が贈られた投稿は、大分のある熟年夫婦が物々交換の市をやっている夜祭りに出かけた時の会話、という設定だった。

旦那さん「おまえを若い美人の奥さんに交換したいなあ」

奥さん「わたしは、あんたを自転車に交換したいわ」

なしか！

ということで、その面白さに魅了された私は、8月からラジオネーム‘ぶら目玉’で投稿を始めたのであった。

・ 8月14日（土）初投稿

寛さん、こんにちは (^o^)/大分で暮らし始めて2ヶ月余、大分ビギナーの‘ぶら目玉’です (*^_^*)

大分では友達は何人もできて、楽しい大分の日々を過ごしています(^_^)/

さて、その友達の一部が、何か話すたびに、最後に“こんやた”って言うのです o(^o^)^o

それはそれはとても明るい響きになるので、友達同士の親愛を示す大分弁なんだろうなあと思いました(^-^)^b

そこで、別の友達に挨拶代わりに「こんやた！」って言ったら、いきなり胸ぐらをつかまれました、なしか！

方言は意味をよく理解してから使いましょう、こんやた(^_^)

・ 8月21日（土）2回目の投稿

こんにちは、埼玉から大分に一時(いつとき)移住中の‘ぶら目玉’です(^_^)/

いや一寛さん、大分はよいところですね(^o^)/

お酒も食べ物も美味しいものばかり(o^-^o)

大分に来てから2カ月余り、おかげで体重が5kgも肥えてしまいました(^-^;

そんな私を見て、ある大分の友人は「目玉さーん、こいたあー！」と、会うたびに言いますが、私、それは「目玉さーん、肥えたなあー！」という意味だと思っていました(^-^ゞ

そんな折、大分の別の友人がメタボ気味なので、挨拶がわりに「こいたいけん！」と言ったら、いきなり胸ぐらをつかまれました(;□;)!!

こいたいけん！□肥えたらいけん！□太ったらいけません！という意味のつもりだったのに、なしか！

大分弁、むずかししかあ、こんやた f^_^;

このころから、この番組の特徴は、大分方言や大分弁会話がその根幹になっているということにだんだん気付き始めたので、3回目の投稿からは、そのことを強く意識をするようになった。大分の人が聞いたら、歯が浮きそうな大分弁なんだろうなあと思いながら…

・ 8月28日（土）3回目の投稿

寛さん、こんにちは、毎日、元気に生活しちよる‘ぶら目玉’じゃ\(^O^)/

と、元気なんはいいんじゃが、最近、歳のせいかわ、肩こりがひどいけん、今日は道を歩きながら、右腕をぐうっと上に伸ばして右肩のストレッチをしたんじゃ\(^o^)

それが気持ちよかったけん、目を閉じ10秒ほど立ち止まったんじゃが、目を開いたら、わしの横にクルマがドアを開けて止まっちゃった(^_^;

タクシーだったち、なしか！

・ 9月3日（土）4回目の投稿

寛ちゃん、どげえかえ？

わしん大分暮らし、日々、自炊、洗濯と、もう普通の日常じゃ。

昨日は、コインランドリーで洗濯したんじゃ。

脱水が終わって乾かそうと乾燥機に入れようとしたら全部使用中だったんじゃが、一つだけ終わっちゃったんのがあったんじゃ。

でん、5分待っても10分待っても誰も取りにこんけん、わし、しびれ切らして、取り出し始めたんじゃ。

したら、後ろからいきなり「よい！なん勝手にわしん洗濯もん取り出しよんのか！」ち、言われてしまったんじゃ、なしか！

と、大分で日々「なしか」に挑む‘ぶら目玉’は、いったいつになったら“なしか大賞”が貰えるのだろうか、なしか！

腰痛に耐えた十日間

白石 傳

—信用されない本当の話—

7月中旬のある朝、いつものように約1時間の散歩に出た。

家を出た直後、左の腰に「あれっ」という軽い痛みが走った。雨になりそうだし、そうそうに帰宅した。朝食まで少し時間があり、机に向かってアメリカ旅行の写真整理をしようとしたがなぜか左足が痛い。ご飯の声で台所へ、食事中も椅子に座ると激痛が、食事が終わるころにはもう歩けなくなった。わずか2時間でこれはおかしい、このままではどうしようもなくなるのではないかと焦った。病院に行こう、どこの病院がいいか救急車を呼ぶか迷ったが家内に運転を頼んだ。年金病院に行く途中も家内は大げさだなあという顔をしていた。車で移動中、20年間付き合い合っている開業医の先生に電話し現状を訴えた。すると先生から「年金に行っても診てもらえないよ、うちに来るように」と冷たくいわれた。この非常時に循環器内科でもあるまいと思ったが行くことにした。

簡単な問診の後、既に用意されていた紹介状を渡された。脳梗塞か脳内出血を予想されていたようだ。年金病院では救急窓口で診察を受けた。脳とか内臓不良からの原因が見当たらないとのことで、整形外科に廻され車椅子に乗せられレントゲン室とかいろいろ行った。3人の医者による集団検診があった。MRIは予約待ちで2週間後、その後医者が診察するとのこと、薬もなく自宅で養生となった。近代設備が整い有能な医者と豊富なデータがある大病院、それが、原因不明のため無罪開放とのこと。

家に帰って、どうしたものか迷った、3日後の町内会議を延期か中止か強行か、結局はその日を待った。

予定どおり、MRIを終わり医者の診察を受けた。MRIを撮るころは歩けるようになっていた、痛みもなくなっていた。骨等は年齢なりに老化が進んでいるが今回のことは関係がないという。予防薬として初めて薬をもらった。バトミントンも継続していいとのこと。では、あの十日間はなんだったのだろう。思い当たることは3日後に強行した町内会議、わずか100mの集会所まで車で送ってもらい、まともに座れないから正座で2時間がまんした。その後から痛みが少しずつ減ってきた気がする。医者に話したが反応はなかった。

単身赴任のころ、毎日飲み会が続きアルコール依存症ではないかと思ったことがある。しばらく、友人との付き合いを自粛したところ約2週間の休肝日ができた。その後、課の飲み会が2日続いた深夜、突然の腰痛におそわれ行きつけの病院に駆け込んだ。その日は注射をうち、翌日改めて病院に行くと、即、内科に廻され、胆石、胃腸その他3週間の検査で原因が分からず大腸がんの検査までやった。腰痛は3日ほどで治っていた。たぶん、病院に行った翌日から積極的にアルコールを摂取したことがよかったのではと思う。

実は今度の騒動の前、約10日間、アメリカを旅行した。異国の土地、団体生活の理由でアルコールを控えめにしていた、腰痛の原因は、その反動ではないかと思っている。

今度も翌日からアルコールを試してみた。その成果かどうかは立証できないが“酒は百薬の長”であることを自分は信じる。

私の「ハレとケ」——居酒屋開眼

吉本 光一

ひとり酒場で 飲む酒は／別れ涙の 味がする……

美空ひばりの「悲しい酒」が世に出たのは 45 年前の夏。「一人ぼっちが好き」などと口では強がりを行いながら、心の裏では、好きで添えないあの人の面影を忘れ去ろうと空けるグラスの中に、それがまた浮かんでくる。敗戦から 21 年。焦土の中から奇跡の復興をなし遂げた男性社会の裏側の世相を詠み込んだ石本美由紀の詩に古賀政男の人懐こいメロディーを当てた名曲は、ひばりの生涯の三大ヒット曲の一つになった。

入社 7 年、新聞社の社会部（大阪本社）で最若造の 1 人だった私には、独り酒が怖かった。酒は嫌いではないが、独り酒を飲んでいる姿をだれかに見られるという恐怖感が、つねに背中にまとわりついていた。

3 年半の地方記者を経て、だれもが憧れた社会部に来た。サツ回り 1 年ほどの後、あてがわれたのは大学・教育・文化担当、社会部の中で一番「らしくない」持ち場だった。そのころテレビの人気番組だった「事件記者」のような派手なアクションやグループの絆とは縁遠い。が、社会面のトップを飾るトピックのネタは山ほどあった。「書けば特ダネ、か」と、先輩の事件記者らからは、皮肉ともやっかみともつかぬ視線も浴びた。

トピック 1。末期癌と診断された大阪国立病院の医師が、「癌の最後は痛い、辛いというイメージばかりや。わいは癌かて笑うて死ねるとこ見せたるで」と発起して、笑顔の闘病生活の記録写真を撮りつづけている・・・と聞いた。いまずぐ会いたい。だが、いまマスコミが大騒ぎをしたら、その志はどうなるだろう。時を待つしかない。そして迎えた告別式。参列した大阪大学の恩師、執刀した外科医長、同僚、友人ら、皆が別室に顔をそろえて、インタビューに応じてくれた。長い付き合いで 3 カ月間、記録写真を撮り続けた関西随一のプロ・カメラマンも初対面の私に、現像したばかりの 47 本のネガフィルムを何も言わずにポンと渡してくれた。写真部デスクが「あの御大がねえ…」と絶句した。その中に、にこやかな笑顔で患者ののどの奥を見つめる診察室内の 1 コマがあった。原稿を書き上げた時は、日付けが替わっていた。大事件なみに朝刊最終版を全面組み替えて「がんかて笑って死ねるんや」の記事と記録写真で埋めた。「癌の告知」の語がまだ生まれていない時期に、その意義を社会に知らしめたトピックと報道だった。同じタイトルの本が講談社から出版され、後に TV ドラマにもなった。

トピック 2。入試に合格していた秋田からの受験生に、大阪市大の学生自治会が誤って「サクラチル」の電報を送り、本人がその間違いに気付いたときは願書締め切り日を過ぎていて、願書を受け付けてもらえなかった。社会面トップの特ダネ記事、大学に殺到した市民の抗議電話。入試要綱に記載した「本人が確認」の条項をタテに、大学側に落ち度はない、と一度は突っぱねた大学当局も、世論に抗しがたく、特段の計らいで救済を決定した。

どうしたら早く書けるか、上手く書けるようになるか。寝ても覚めても、そればかり考えていた。独り酒を飲んでいる時間なんて、現実にはなかった。

もし、何かの弾みで独り酒を飲むことがあって、その場を人に見られたら、現実の自分

とは似ても似付かぬ姿が、人の口から口へと伝わってゆくだろう。

酒よ心が あるならば／胸の悩みを 消してくれ.....

そんなイメージが自分と重なって人の目に映ることを、極度に警戒した。

独り酒恐怖の呪縛を断ち切って開放してくれたのは、柳田国男の「ハレとケ」の民俗学だった。かいつまんで紹介すると——日本民族の日々の生活は、日常（ケ＝ふだん着の生活）と非日常（ハレ＝晴れ着の生活）の二つの要素で成り立っていたというもので、その中で、非日常がいかに重視されたか、そして酒の位置づけ、役割なども見事に説明している。これは、私たち日本人が古来伝承してきた伝統的な世界観ということもできる。これを知って以後は、酒をたしなむことが自分自身にとって重要な行事であり、だれに見られても恥じ入ることはないのだ、と自信を持って独り酒を飲めるようになった。

ハレとは「晴れ」であり、もとは折り目、節目を指す言葉だったが、次第に儀礼、祭、集団の年中行事などの非日常的な生活を指すようになった。ケは「芸」、ふだんの生活である。ハレの日には、よそ行きの着物（晴れ着）を着て、もちや赤飯、白飯、尾頭付きの魚、酒など、ふだんは口に入らないものを、とっておきの食器に盛って楽しんだ。晴れ着に対し、ふだん着はケ着（けぎ）であり、江戸時代までこの言葉が実際に暮らしの中で使われていた、という。

年中行事にはないハレの日が、突然やってくるのがあった。日常生活を営むためのケのエネルギーが枯渇したときで、これをケガレ（芸枯れ）といった。人の死もそうだ。もとはケのエネルギーが枯れた状態と受けとめられていたのが、後に仏教が渡来して不浄の概念が伝えられると、これと重なり合って、ケ枯れ＝穢れ（不浄）となったとか。ケの気を失ったケ枯れの日にはもはやケの日ではない。ハレの祭事を行うことでケ枯れの状態は回復すると信じたのではないかとみる学者もいる。葬儀の後の直会（なおらい）の席も、ケ枯れからの回復をはかるための祭事、と考えればなるほどと合点がゆく。

祝う、悲しむ、悼むといった感情を伴う行動が酒と結び付いたのはずっと後の世で、この時代の酒はハレの日の祭事という位置づけであり、注目すべきは、ハレの日とケの日の区別、すなわち線引きをだれが行うか、という点である。

縄文時代の吉野ケ里遺跡には、集落の中に巫女が祭事を行った「祭りごと」の棟が独立している。農耕民族では、祭事は集落単位の行事で、ハレとケの線引きは巫女の役目だった。江戸時代になると、都市化と町人文化は、祭事を町内単位、家単位へと細分化した。ウチの店では丁稚（でっち）のお膳に尾頭付きが載るは月の1日と15日、という具合に、線引きの役目は店主・家長の手に移った。その後も、線引きの権限は、戦前までは一家の長の手にあった。柳田国男が「酒は家長専制的だが、菓子の流布には男女平等の主張がほの見える」と書いている。

この様相を一変させたのは、日本を経済大国の座に担ぎ上げた戦後の産業の発展だ。あらゆる分野で職業が多様化・専門化し、それとともに日常生活の個別化が家庭内でも進行した。朝飯、夕飯の食卓に家族全員の顔がそろわなくなるのと平行して、ハレとケを一家で統一することができなくなった。世の中の動きの高速化とともに、日単位だったハレとケの区分も、時間単位に移行しだした。こうして「ハレとケ」は個別化の時代に入った。

高度成長期に流行った「5時から族」をそのはしりとみるか、典型とみるか。

「さあ、これからはオレのハレの時間だ」。それまでは越えがたい垣根のように見えていたなわのれんが、そう思ったら、抵抗なく潜り抜けられたのを覚えている。居酒屋開眼、立ち飲み解禁である。懐と相談するほどのこともなく、ケ枯れたエネルギーを回復することができる、居心地のよい場が身近にあるとは、何と幸せなことか。エネルギーだけでない。良い場は良い友との巡りあいの媒介もしてくれる。人の輪（=和）がある。

人生の晩年に地縁も血縁もない地で、独り酒を飲んでいて巡りあった飲み友だち。交流を深め、九州の最南端にも、海外にも一緒に旅してくれる、いまは心許せる友がいる。この場に、そしてそこへの扉を開いてくれた柳田国男に心から感謝している。



編集後記

大震災後の東北、がれきの町。66年前、全国の都市が同じ姿だった。その中で人びとが生きるエネルギーを求めた先が、密造酒のカストリとガリ版刷りの文芸誌。澱（おり）を沈めるために砒素（ひそ）を加えたカストリは3合飲むと目が潰れ、おおかたは3号で潰れたガリ版誌に「カストリ雑誌」の異名が付いた。

皆さんのお力に支えられてカストリの魔の手を逃れた本誌は、10号まで続いたら単行本のご褒美が出るとか。角打ち人生の自分史のいまの一コマを記録して？十年後に残すタイム・カプセルに。

(碰々仙)

「夕方なしか」は笑える、文字でなく耳で聴けばまた一段と笑える、いや、ニタリとする由。そのパーソナリティの「寛ちゃん」のステッカーを載せてみた。

櫻木君の原稿が溜まっていた、ここで一気に掲載した。ありがとう、ごめんなさい。

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら。」

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であれば言うことなしです。

投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、kei2@bronze.ocn.ne.jpへ宜しくをお願いします。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP(<http://homepage1.nifty.com/haraguchi/sake/>)もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索してくださいの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は11月9日(10月29日締切り)とします。

(今朝の鮭)

はらぐち酒店: 北九州市戸畑区中本町4番9号
電話093-871-2150
sake-tobata@nifty.com